

# 移住者日記

No.11

食堂と民泊のお店フキノトウ

吹野 美登 様  
幸江 様



初めて富岡町を訪れたのは、2019年のことで、東京の職場の元同僚が、富岡町でワイナリーを立ち上げると聞き、ボランティアとして手伝いに来たのが始まりでした。当時はたくさんのバリケードが設置されており、人の姿も少なく、「来ても大丈夫なのかな」と不安に思ったことを覚えています。ですが、ブドウ畠には多くのボランティアが集まり、笑顔と活気にあふれていました。その時間が本当に楽しく、「またここに来たいね」、「いつかここに住めたらいいね」と自然に話していました。それから数年間、私たちは毎月のように富岡町へ通い、ボランティアを続けながら、地元の方々とのつながりを築いていきました。勢いだけで移住を決めくなかったため、通いながら気持ちを確かめていましたが、その思いは変わらず、3年前の2022年に富岡町に移住し、2024年5月に家庭料理と民泊のお店「フキノトウ」をオープンしました。東京に住み続けるか、それとも富岡に移住するか、私たちにとっての選択肢はその2つでしたが、以前から起業してみたいという思いがありましたし、どうせ挑戦するなら体力のある今のうちにと考えました。夫は地元の裁縫工場の立ち上げを手伝う仕事を紹介してもらい、今は私も同じ会社で経理を担当しながら、夫婦で食堂と民泊を営んでいます。

富岡町での暮らしは、首都圏にはない人の温かさがあります。ご近所同士のお付き合いも気にかけてくれる方ばかりです。不便を感じることもなく、欲しいものがあればインターネットで手に入る時代ですから、特に困ることもありません。放射線についても、町民のみなさんが「大丈夫だよ」と言ってくれますし、報道で見ても、もう問題ないと感じました。どこにいても、日常生活の中で放射線は浴びているものですから、特別に意識したことはありません。

民泊を始めようと思ったのは、ワイナリーでのボランティア活動の後に行われる交流会の際に、「お酒を飲みたいが、泊まれる場所がないので、飲まずに帰る」という声を聞き、飲食と宿泊ができる場所があれば、人々が交流をもっと深められると思ったのがきっかけです。今は、そんな場所を自分たちの手でつくることができて、とても嬉しく感じています。

移住してから、私たちは町内で3回引っ越しをしています。海が見える場所を探していましたが、なかなか理想の土地が見つからなかったのですが、ワイナリーの仲間からの紹介でご縁がつながり、ようやく今の場所に出会えました。金・土曜は食堂を開け、民泊は要望があればその都度対応しています。最近は日替わり定食のメニューを考えるのが悩みの種で、スーパーの特売情報を見ながらぎりぎりで決めている日もあります。

趣味がランニングなのですが、ふくしま駅伝の富岡町代表として出場する機会にも恵まれました。幅広い年代の方たちと一緒に練習する中で、新しい仲間もできました。夜に走ると、星空が本当にきれいで、月の光が海に反射して輝いています。その光景を見ながら走る時間は、東京では味わえなかつたものです。そんな瞬間に、心から「ここに移住して良かったな」と感じます。

静かな町と思われるかもしれません、私たちには一緒にいて楽しい仲間がいますし、二人で力を合わせれば、どんなことでも乗り越えられる気がします。これからもこの町で、自分たちらしく、穏やかに暮らしていきたいと思っています。